

## はじめに

### ❖ 京大英語は日本一難しい問題

日本の最高峰と言われながら、東大と京大では英語の試験内容はかなり対照的である。東大がいろんな形式の出題をするのに対して、京大は極めてシンプル！ 基本的には英文和訳と和文英訳だけである。東大が処理能力を要求するとすれば、京大は英語の実力そのものを試していると言える。東大の問題の一つ一つは決して難問とは言えない。数多くの問題をテキパキこなしていかにか高い総合点を獲得するかが勝負と言える。一方の京大は、じっくり文構造や構成を考えながら解答していくことになる。そういう意味では、英語で日本一難しい問題を出しているのは、実は東大ではなく京大なのである。選択肢の問題はほとんどなく、記述ばかりだ。英語に限らず、その科目の本当の実力を試すのなら、文を書かせるのが一番だと思う。マークシートのような選択肢方式の試験では何も見えてこない。その点、昔からそうした姿勢を現在まで貫いている問題を出題しているのが京都大学である。

### ❖ 英文和訳問題は難構文と訳しにくい箇所

では、実際にどのような箇所が英文和訳の対象になるのかというと、大きく分けて二つある。一つは文構造そのものが難しい箇所、すなわち「難構文」が現れるところである。修飾語が多くて、どれが文全体の主語・動詞なのか、一見してわかりにくいような部分である。その修飾語という名の枝葉末節をかき分けて、文の太い幹を探すという分析作業が必要になる。二つ目は、英文そのものは単純でも、直訳では日本語として意味が通らない、ないしは不自然な訳語になってしまう箇所である。こちらは、英語力に加えて日本語力も要求され、受験者のそれまでの日本語のボキャブラリーも試されることになる。後者は出題される文章の内容や文脈次第でいくらかでも良い解答が考えられ、日本語力自体は学習者各自で多読をするなどして身につけていくしかないので一般的な教本は作りにくい。そこで、本書は前者の難構文に焦点を当てて、難構文のパターンや出題者が下線を引きたくなる箇所を紹介し、その見破り方を提示することにする。

### ❖ 難構文のパターン

一概に難構文といっても様々なパターンがある。そもそも何をもって構文と呼ぶのかの定義が曖昧なため、難構文に対する解釈も多岐にわたるのであるが、筆者は基本的には“文構造がとらえにくいので誤訳してしまいがちな英文”の

ことを意図している。具体的には、第3文型(主語+動詞+目的語:SVO)の動詞と目的語の間に修飾語語句(M)が入り込んだために<SVMO>の形になっているもの、関係代名詞と先行詞の間が離れているというような<遠方修飾>、受身形などの影響で熟語が本来の語順ではなくなる<熟語くずし>、書かれていないのだから気がつかないのも無理はない<省略>、現在分詞と動名詞のように形が同じためにどちらで解釈するかによって訳語が変わってしまう<同形表現の区別>などである。その他、難構文以外に、京大で過去に出題されたものの中から、未だに<辞書にははっきり記載されていない熟語>や<意識が必要な単語・構文><世間の訳語では語弊がある熟語>などもこれを機会に集めてみた。

### ❖ 本書の対象者

したがって、本書は英文読解の基礎がある程度わかっている方を対象にした、上級者向けの難構文が含まれた英文読解の教本である。上級とはいえ、項目によってはその先の説明の関係上、基礎から記述した箇所もあるが、基本的には一段上の英語力を目指す方のために執筆した。よって、英語の先生方をはじめ、社会人で本格的な英文読解に挑戦したいと望んでおられる方、京大が出題する英語はどの程度なのかをお知りになりたい方、京大の英語を通じて英語力の伸長を図りたい方、そして言うまでもなく、これから京大受験を希望している受験生には是非とも目を通していただきたい。

### ❖ 本書の効果

本書を読むことで、ただ普通に英文を読んでいただけの状態から、この一見難しそうな英文を正しく理解し解釈するカギはなんであろうかと構えながら読んでいく姿勢が変わっていくものと思う。それだけでも、もうすでに大変な前進である。昨今のオーラルコミュニケーション重視の軽い英語教育だけでは見えてこない、英文の奥深さを堪能していただきたい。

2016年1月

小倉 弘